

リーディング

21世纪日语学习丛书

日语在用·阅读系列

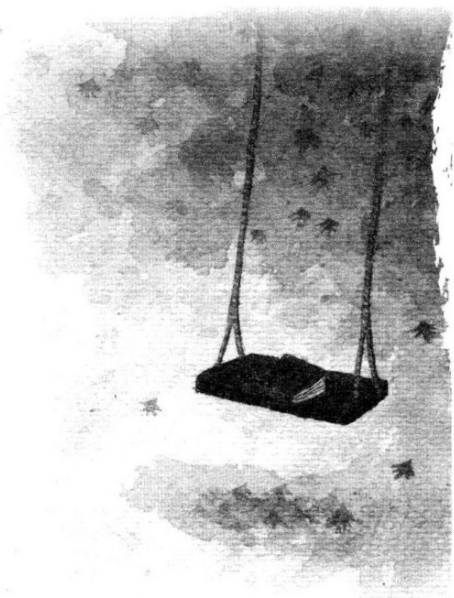
主编 陆静华

日语散文精华



21世纪日语学习丛书
日语在用·阅读系列

日语散文精华



主 编 陆静华

 华东师范大学出版社

图书在版编目(CIP)数据

日语散文精华/陆静华主编. —上海:华东师范大学出版社, 2008

ISBN 978-7-5617-6202-8

I. 日… II. 陆… III. ①日语-语言读物②散文-作品集-世界 IV. H369.4:I

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2008)第 101888 号

日语散文精华

主 编 陆静华
责任编辑 李恒平 孔 凡
审读编辑 孔 凡
责任校对 朱 芬
装帧设计 黄惠敏

出版发行 华东师范大学出版社
社 址 上海市中山北路 3663 号 邮编 200062
电话总机 021-62450163 转各部门 行政传真 021-62572105
客服电话 021-62865537(兼传真)
门市(邮购)电话 021-62869887
门市地址 上海市中山北路 3663 号华东师范大学校内先锋路口
网 址 www.ecnupress.com.cn

印 刷 者 上海市印刷三厂
开 本 890 × 1240 32 开
印 张 9.25
字 数 292 千字
版 次 2008 年 10 月第一版
印 次 2008 年 10 月第一次
印 数 4100
书 号 ISBN 978-7-5617-6202-8/H·403
定 价 19.00 元

出 版 人 朱杰人

(如发现本版图书有印订质量问题,请寄回本社客服中心调换或电话 021-62865537 联系)

编者的话

2007年初,华东师范大学出版社来我校组稿,我有幸获得出版这本《日语散文精华》的机会。说句老实话,自从接下这个任务,我既惊喜交集,又惶惶不安。

我从1974年开始从五十音图起学习日语,以后就一直奋斗在日语领域。一晃已经过去三十多年了。如今已经临近退休的年龄。可以说,我这一辈子,除了下乡那几个年月,剩下所有的岁月及精力全都用于同日语打交道上了。

记得刚学日语时,就曾听说,“日语入门容易学好难”。可当时我对这种说法不甚理解。当走到今天,回首往事时,我才深深领悟到前人的这一心得。如上所说,我这一辈子与日语打交道,可终究还是未能学好日语。如今要用这未学好的日语来编写这本《日语散文精华》,可谓力不从心。这是自己的不安之一。

是行家都知道,翻译水平最终取决于双语水平。即外语水平的高低和中文底子的厚薄。遗憾的是,我们这一代人,由于历史的原因,曾经失去深造的机会和最佳时机。在这方面,犹如一个早产儿,尚不足月,便早早地降临人世,一路饱经风霜。如今接受这个任务,可谓底气不足。这是不安之二。

但我还是挑战性地接下了这个任务。学了那么多年日语,无论从年龄还是体力上讲,我的事业已经接近尾声。一种不可名状的东西,总在我的心里蠢蠢欲动。我深深热爱日语,总想用自己一辈子深爱的日语做点什么。这,无论在别人眼里看来多么不值,但只要是我自己所爱,我愿意倾注我的心血。我深深明白,没有第一步,就不会有第二步,没有前人,就不会有后

人。我愿意做一颗铺路的石子,让后人踩着我,去迎接灿烂的明天。《日语散文精华》给了我实现这一愿望的机会。这是我的喜悦。

我读过各种文体的日语文章,其中最爱的是日本的随笔。那美丽的语言、发人深思的思想、幽默的描写、平淡而又感人的叙述,有时令我拍案叫好,有时让我热泪盈眶,有时又令我陷入深深的沉思。

我愿意以自己微薄的力量,把我的感受传染给广大的日语爱好者。我深深希望学习日语不只是为了实用,更希望通过学习日语来感受日本文学的灿烂和光辉。我相信,文学不会绝迹于任何一个经济发达的社会。

除了惊喜和不安之外,我还有无限的遗憾。一年的时间,不长也不短。可是,在本来就很繁忙的工作之余,再执笔《日语散文精华》,令我力不从心。尽管,我尽最大力量去挑选优秀作品,在编译过程中不惜时间和精力,频频更换作品,可最终还不能对所有的入选作品感到满意。虽然意犹未尽,无奈交稿期迫近,只得就此作罢。

本书为方便繁忙学习和工作中的读者阅读,尽可能地对文章注上了读音,加上了生词表,还对作品中的语法难点作了简单的说明。无论是生词还是难点解释,凡有两种以上意思和用法时,均以作品中的用法为主。

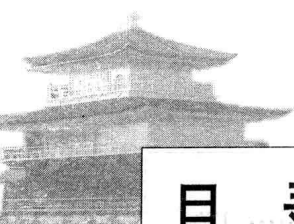
如上所叙,鉴于本人的水平和时空的限制,定会有许多不尽如人意之处,欢迎广大读者和同仁批评指正,以求进一步的完美和完善。

同时,借此机会,对曾经给予帮助的华东师范大学教授高宁老师、北村令子、大西进、稻森信昭等各位日籍教师以及华东师范大学出版社的编辑表示由衷的感谢!

编者

2008.5.7



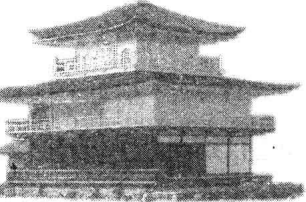


目 录

1. 海の夜明け	1
2. 猫の動物学的宇宙誌	14
3. 樹の根	24
4. 公園にて	35
5. 無常のリズム	50
6. 耳ぶくろ	58
7. 愛が甦える	71
8. ミロのヴィナス	83
9. 雑器の美	94
10. 五十歩の距離	106
11. 転石 苔を生ぜず	118
12. 桜について	131
13. 時計はなぜ右回りなのか	140
14. 母を悼む	150
15. たんぽぽ	159

16. ラーメン国体学序説	170
17. 春の訪れ	179
18. 陰影の美	189
19. 一枚の葉	201
20. 基督降誕祭前後	212
21. かゆいところ	225
22. 日本の耳	238
23. 海洋の旅	247
24. 最初の喪失	256
25. 金原純男	272





1. 海の夜明け

たかだ ひろし
高田 宏

夜明け前の^{ほのくら}仄暗く青い空に^{せんげつ}纖月がかかっていた。

光りの強い星がいくつか、遠くからその細い月をかこむようにまたたいていた。女の^{かまゆ}描き眉にたとえられるのは^{みかづき}三日月だが、その朝の月はもっとほっそりして、コンパスで短い^こ弧を引いたような鋭い線を見せていた。

ぼくの好きな時間だ。太陽の^{しゅつげん}出現にはまだ^ま間のあるこの時間、^{せいじやく}静寂のなかで^{てんち}天地の^め目ざめが^{はじ}始まっている。

そっとホテルを抜け出して、まだ足もとの^{こたち}暗い^{みち}木立の道を過ぎ、^{みさき}岬の^{せんたん}先端に出てみると、^{あしづりみさきとうだい}足摺岬灯台の^{こうせん}光線がまわり、大きくうねる^て波を照らしていた。^{しおさい}潮騒が重くざわめく太平洋上の空高く^こ纖月が光り、すこし離れた空に^{うろこぐも}鱗雲が列をつくっていた。

空も海も^{こつこく}刻々目ざめてゆく。鱗雲が赤々と染まりだす。星が一つ、また一つと消えてゆき、空の青が^{あんしよく}暗色から^{めいしよく}明色へと移ってゆく。気がつくと灯台の光がなくなっていた。たぶんセンサーがはたらいて、海上の明るさが増してくると^{しょうとう}消灯するのだろう。

水平線を破って太陽が立ち上がってくる。波と雲がきらめく。^{うみどり}海鳥たちがその多彩な光のなかをシルエットで飛び、^な鳴き^か交わす。

海鳥たちも、ぼくも、生きている。彼らの^{せい}生のよろこびが、ぼくに伝わってくる。ぼくのなかで、よろこびが^{はじ}弾ける。面倒なことは何ひとつ考へなくていい、これが生きるということだ。そんな気がする。^{ないぞう}内臓の一

一つが、筋肉の一つ一つが、細胞の一つ一つが、ぼくの意味とはかわりなく、よろこびの声をあげる。水平線を離れた太陽がまっすぐぼくに
ひかり
光のシャワーを浴びせてくる。

能登の内浦や、佐渡の北端で、網起こしの船に乗せてもらったときも、
まだ星空の下の方港を出てやがて沖合に着くころ、夜明けの太陽が海を
きらめかせると、海鳥の群れがいっせいに鳴きだして、空を舞い、波間を
飛んだ。寒さにふるえていたぼくのからだを、太陽の熱線があたため、こ
わばっていた筋肉をゆるめてくれる。あれらの時間もまた、鳥も人も、お
そらく岩場を這う虫も、生きることのよろこびに全身をひたされる時間
なのだ。

足摺岬には、四国八十八箇所遍路道の一部でもある断崖沿いの細道
がつづいていて、道の両側には樹齢がよほど古いだらうと思われる太
い樺の大木が並んでいる。その樺道がオレンジ色に染まっていた。海
上に昇りはじめた太陽の光線の入射角度によるのだろうか、樺の枝越し
に射してくる光が、樺にかこまれた細道に明るいオレンジ色を湛えて
いた。かつて、不治の業病をかかえて遍路をつづけ、遍路道に倒れてい
った人びとがあったと聞くけれども、その不幸な人のいくたりかは、この
光だまりのなかでいつときの平安を得たかも知れない。

ぼくは夜明け型人間だ。若いときには夜型だったが、中年で朝型にか
わり、やがて夜明け型になった。東京の家にも山(八ヶ岳山麓)の家
にいても、たいてい日の出前に起き出して、空の明るみはじめるのを見て
いる。旅先でもその癖で、まだ暗いうちから旅館やホテルを出て、外で夜
明けを迎えることが多い。海辺の宿ではことにそうだ。房総半島太平
洋岸の御宿では、夏だったので宿の浴衣のまま浜へ出かけてしまい、あ



まりの寒さにほんとうに歯がガチガチと鳴ったのだが、日の出の空と海
とに引きつけられて、砂を巻き上げて吹く朝風のなか、浴衣のまま立ちつ
くしていたこともあった。これまで約四十の島へ行っているのだが、その
ほとんどの島で夜明けの散歩に出かけたのも、日の出前後の海と空を見
ないと、どうも島へ行った気にならないからだ。小さい島では宿の朝
食までに、島をひとめぐりしてことになる。その途中、水平線から
現れる太陽や、本土の山なみから上がって海を染める太陽を見る。宿に
帰って朝食をとったあとの昼の海は、もう色の褪せてしまった写真のよう
に見える。

岬でもそうだ。岬へ行って夜明けの海を見なかったら、岬を見たこ
とにはならない。

南九州の都井岬では、二泊して、二日とも夜明けの岬を歩いた。そ
の一日はソテツの自生する原生林に迷いこんでひるんでしまったりもし
たのだが、もう一日の夜明けは野生馬たちが群れている大きな丘の斜面
に立っていた。馬のたてがみをなびかせる海風で、うっかりすると背中
を押され、大きく海へ向かって傾いている草原に転倒しそうだったけれ
ども、空は澄みきった青で、海もその青を映して明るく光っていた。馬た
ちの食べている草のあいだに、黄色い花や白い花が咲いていた。

斜面の中ほどに数本の木立があり、その木蔭に母馬と子馬がいた。子
馬は生まれてまだ四、五日といったところだろうか、母馬の乳を飲みなが
ら、くの字にまがった足をふらふらさせていた。

そっと近づいて、草に座って母子馬を見物していると、やがて乳を飲
み終わった子馬が母馬の首の下にすっぽりと入る形で、母馬と同じ方向
に耳を立てた。母馬の目も子馬の目も、岬の先にひろがる海へ向いて

いる。そのまま彫像のように動かなくなった。母馬の尾が風に揺れるだけだった。

生まれたての子馬の目に、夜明けの海がどう映っているのだろうか。
——まばたきできないくらい、きれいだなあ。

自分の生まれてきた世界を、そんなふうに、美しいものと見ているのではないだろうか。ぜひとも、そうであってほしい、と思った。

生まれてきたものにとって、この世界はきっと美しいはずだ。そうでなかったら困る。はじめて見る世界が、心をなえさせるものであっては、生きることは初めから苦行になってしまう。世界が嘔吐をさそうほど醜悪なものであったら、どんな生きものにとっても、生きてゆく元気が出てこないだろう。

この岬の草原で、夜明けの海にみとれることのできた子馬は、ほんとうに幸せだ。その海の水を分析したら、ぼくたち人間の暮らしから出る汚物で汚染されているのかも知れないが、とりあえず子馬の目にはそれは映らない。子馬は勇気を持って生きてゆくだろう。

北海道の羽幌沖にある焼尻島で、夜明けの牧場を歩いていたとき、朝の太陽が草原の朝露をきらめかせだしたころ、数百頭の緬羊が首を上げてメエエ、メエエと鳴きはじめた。朝の日本海が眼下に光って見える牧場道で、ぼくもつられてメエエと声を出してしまい緬羊たちをおどろかせてしまったのだが、そういうときはたしかに、食欲のほうに気をとられていることはできない。

メエエ、メエエ、メエエ……

この空と海と草原の夜明けに、讃歌あらざるべけんや、である。草を食べるのは、またあとでいい。

徳富蘆花の「自然と人生」に「大海の出日」という一編がある。明治二十九年十一月四日早暁、犬吠埼灯台を左手に見る断崖上の宿から、まだ仄

くろい太平洋が刻々明けてゆくのを見て、その光景の変化の^{しょうさい}詳細を描いた
写生文である。蘆花の息のはずみが聞こえてくるような文章だ。風景を
写生している文章には違いないが、その風景は見ている蘆花の目と心を
うばっている。その後半部からほんの少し引こう。

すでにして曙光は花の^{ひら}発くがごとく^{けんぱ}圈波の広まるごとく空に水に広が
り行きて、水いよいよ白く、東の空ますます^き黄ばみ、^{げんげつ}弦月も灯台もわれと
^{うす}薄れ行きて、果てはありとも見えなくなりぬ。(中略)東の空見る見る^{こんこう}金光
射し来り、忽然として^{しやうこう}猩紅の一点^{うみばた}海端に^う浮かみ出でぬ。すはや、^{ひい}日出で
ぬ、と思ふ間もなし。息をもつかせず、^{またた}瞬く間もなく……

蘆花はたんに海の日の出を面白がって書いたのではないだろう。この
世界が生きるに^{あた}値するものである、その^{あか}証しとして書いたのだ、とぼく
には見える。

『海と川の物語』より

作者介绍

たか だひろし
高田 宏 (1932 年～) 日本作家、随筆家。出生于日本京都市。毕业
于京都大学文学部法语学科。曾在光文社、亚洲经济研究所等地担任过杂
志编辑。之后开始写作生涯。主要著作有《面向语言的海洋》《烧岛》等，还
有大量的以树木、森林、旅行、雪等为题材的随笔、评论和游记。1990 年以
《遇树》获得读卖文学奖。

生词

仄暗い(ほのくらい)	(形) 微暗的,勉强看得见的光亮
織月(せんげつ)	(名) 月牙
またたく(瞬く)	(自五) 闪烁,眨眼

三日月(みかづき)	(名) 娥眉月, 月牙
ほっそり	(副) 纤细, 苗条
コンパス(compass)	(名) 圆规, 罗盘
目ざめ(め覚め)	(名) 睡醒, 醒来
木立(こたち)	(名) 树丛, 小树林
足摺岬(あしずりみさき)	(地名) 足摺海角(位于日本高知县西南部, 足摺半岛南端)
うねる	(自五) 滚动, 翻腾, 弯曲, 蜿蜒
潮騒(しおさい)	(名) (涨潮时)波涛怒吼, 波涛声
ざわめく	(自五) 人声嘈杂, 喧闹声
鱗雲(うろこぐも)	(名) 卷积云, 像鱼鳞似的小块排列着的云
センサー(sensor)	(名) 传感器, 感应装置
きらめく(煌めく)	(自五) 闪闪发光, 闪耀
シルエット(silhouette)	(名) 剪影, 影像, 轮廓
能登(のと)	(地名) 能登(位于日本石川县北半部)
内浦(うちうら)	(地名) 内浦町(位于日本石川县能登半岛尖端附近)
佐渡(さど)	(地名) 左渡岛(位于日本新潟县)
沖合(おきあい)	(名) 海上, 洋面上, 湖心
こわばる(強張る)	(自五) 僵硬, 发硬
ひたす(浸す)	(他五) 浸湿, 弄湿, 浸泡
遍路(へんろ)	(名) 朝圣(巡礼者), 在日本指前往四国地区八十八名刹(的人)
いくたり(幾人)	(名) 很多人, 多少人
椿(つばき)	(名) 山茶
湛える(たたえる)	(他一) 洋溢
業病(ごうびょう)	(名) 孽病, 所谓的因前世作孽遭报应而得的难治之症
いっとき(一時)	(副) 一会儿
八ヶ岳(やつがたけ)	(地名) 八岳(位于日本长野、山梨县境内的火山群总称)



房総半島(ぼうそうはんとう)	(地名) 房总半岛(位于日本千叶县南部)
御宿(おんじゅく)	(地名) 御宿町(位于日本千叶县东南部,濒临太平洋)
ガチガチ	(副) 格格,得得(硬物相撞声)
引きつける(ひき付ける)	(他一) 吸引,吸引人,讨人喜欢
一巡り(ひとめぐり)	(名) 转一圈
褪せる(あせる)	(自一) 褪色,掉色,变薄,减退
都井岬(といみさき)	(地名) 都井海角(位于日本宫崎县南部串间市)
ソテツ(蘇鉄)	(名) 凤尾蕉
ひるむ(怯む)	(自五) 畏怯,畏缩,怯阵
たてがみ(鬘)	(名) 髻,髻毛
なびく(靡く)	(自五) 随风飘动,顺水漂流
ふらふら(ふらふら)	(自サ) 摇晃,踉跄
萎える(なえる)	(自一) 萎靡,无精打采
すっぽり(と)	(副) 完全蒙上貌,包严,盖严
ぜひとも	(副) 务必,一定
苦行(くぎょう)	(名) 苦行,通过禁欲自苦来强化信仰的一种修行,艰苦锻炼
みとれる(見惚れる)	(自一) 看得出神,看得入迷
羽幌沖(はぼろおき)	(地名) 羽幌洋面(位于日本北海道西北部)
焼尻島(やぎしりとう)	(地名) 烧尻岛(位于日本北海道西北部、距羽幌町 20 公里处的洋面上的岛屿)
徳富蘆花(とくとみろか)	(人名) 徳富芦花,日本小说家,出生于日本熊本县,以小说《不如归》而闻名。著有随笔《自然与人生》、小说《回忆》等
大吠崎灯台(いぬぼうさきとうだい)	(地名) 犬吠崎灯塔(位于日本千叶县铫子市东端)
黄ばむ(きばむ)	(自五) 呈现黄色,带有黄色
弦月(げんげつ)	(名) 弦月,弯月,上弦或下弦的月

われと(我と)	(副) 自觉地,主动地,自然地,自动地
果て(はて)	(名) 边际,止境
猩紅(しょうこう)	(名) 猩红色,绯红色,鲜艳的深红色
海端(うみばた)	(名) 海边,海岸,海滨
証(あかし)	(名) 证据,清白的证明

疑难解释

1. センサーがはたらいて

「働く」是自动词。除了表示“工作”的意思之外,还有“起作用”的意思。文章中的「センサーがはたらいて」,表示“传感器起了作用”的意思。又如「りんごが地面に落ちるのは地球の引力が働いたから」,意为“苹果之所以掉到地下,是因为地球的引力产生了作用。”

2. なにひとつ考えなくていい

「なにひとつ」与动词否定式相呼应使用,表示不做任何行为。文章中的「なにひとつ考えなくていい」表示“可以不考虑任何事情”的意思。又如「なにひとつ食べていない」,意为“没吃任何东西”。

3. 断崖沿い

「～沿い」是接尾词,它接在名词的后面,表示“沿着……”的意思。文章中的「断崖沿い」表示“沿着悬崖”的意思。又如「夕食後はいつも川沿いに散歩する」,意为“晚饭后总是沿着河流散步”。

4. どうも島へ行った気にならない

当「どうも」和一个否定式相呼应使用时,表示“怎么也不……”的意思。文章中的「どうも島へ行った気にならない」表示“怎么也没有去过岛屿的感觉”的意思。又如「一生懸命探したが、どうも見つからなかった」,意为“拼命寻找了,可是怎么也找不到”。



5. 色の褪せた写真のように見える

「～ように見える」表示“看上去像……；看似……”的意思。文章中的「色の褪せた写真のように見える」表示“看起来像一张褪了色的相片”的意思。又如「宝石のように見える猫の目」，意为“看似宝石般的猫眼”。

6. 子馬は生まれてまだ四、五日といったところだろうか

「～という(いった)ところだ」可以接在动词或体言的后面，表示“差不多是……；也就是……”的意思。文章中的「子馬は生まれてまだ四、五日といったところだろうか」表示“小马生下来差不多是四、五天吧”的意思。又如「タバコもせいぜい一日三本といったところだろう」，意为“香烟最多也就是一天抽3支吧”。

7. 生まれたての子馬の目に

「～たて」是接尾词，接在动词的连用形后面，表示该动作“刚刚”发生。文章中的「生まれたての子馬の目に」表示“在刚刚出生的小马的眼里”的意思。又如「焼きたての秋刀魚はたいへんおいしい」，意为“刚刚烤好的秋刀鱼非常好吃”。

8. この空と海と草原の夜明けに、讃歌あらざるべけんや、である

「あらざる」是「あることがない」的意思。「べけんや」是「べし」的文言表达。文章中的「この空と海と草原の夜明けに、讃歌あらざるべけんや、である」改用现代日语表达为「夜明けの空と海と草原のすばらしい眺めを前にしては、このすばらしさを賛美する歌を歌わないでおられようか(いや、できない)」，意为“面对如此美丽无比的黎明中的天空、大海和草原，我们怎能不唱赞歌呢。”

9. 曙光は花の発くがごとく圏波の広まるごとく空に水に広がり行きて

「ごとく」是文言助动词「ごとし」的连用形。相当于现代日语中的「ように」。文章中的「曙光は花の発くがごとく圏波の広まるごとく空に水に

広がり行きて」,改用现代日语表达为「すでに夜明けの光は花が開くかのように、また波の広がるように空と水面に広がり」意为“黎明之光像盛开的花朵,又像大海上的浪花,在天空和水面上涨开。”

10. すでにして曙光は花の発くがごとく圈波の広まるごとく空に水に広がり行きて、水いよいよ白く、東の空ますます黄ばみ、弦月も灯台もわれと薄れ行きて、果てはありとも見えなくなりぬ。(中略)東の空見る見る金光射し来り、忽然として猩紅の一点海端に浮かみ出でぬ。すはや、日出でぬ、と思ふ間もなし。息をもつかせず、瞬く間もなく……

上述短文为日语文言文,用现代日语表达为“すでに夜明けの光は花が開くかのように、また波の広がるように空と水面に広がり、水はいっそう白く、東の空はますます黄色みを帯び、半月も灯台も自然に視界から薄れていき、そのあげく、見えなくなってしまった。東の空を見ると、金色の光が射ってきて、たちまちにして鮮やかな深紅色の一点が海の端に浮かび出た。もう日が出たのだと思う間もなかった。息つくまもなく、瞬きをする間もなく……”。

参考译文

大海的黎明

高田 宏

黎明前幽暗的蓝天上挂着一轮弯弯的月牙。

天空中有几颗明亮的星星,远远地围绕着这轮细细的弯月闪烁着。人们往往把阴历初三的月牙比作女人的蛾眉。而这天早晨的月亮看起来更为纤细,仿佛是用圆规画出一条短短的弧线,显得那么尖瘦。

这是我最喜爱的时光。离日出还有片刻时间,在这段寂静的时间里,天地开始苏醒。

我悄悄地溜出宾馆,穿过尚在黑暗之中的树林,来到海角顶端。足折海角灯塔上的灯光不断旋转着,照亮了急剧翻腾的海浪。太平洋里波涛汹涌,上空高挂的月牙闪烁着银光,月牙近处的天空上排列